

種新聞圖解の内
郵便報知新聞
第五百九十八號

晋子が吟み我雪と思へ程
き番傘と肩傘を通る四國
の河も埋る汁ある二月下旬の
銀世界富む雪の名も又對て
貧も迫り飢勞れ糸布子も
堪兼る寒苦と詫て橋上より
身と逆す小投棄んと力泣く
桐干し足踏らるる後より止る刀主の
綾瀬川山左衛門が門人玉手写三八と
呼きて強き大漢此老人が苦情の一部
始終を聞よつて鬼も性く丈夫が鬼の眼
ちらぬ仙氣は襦袢の袖と干あは説諭を加へ
死と止め持合せたる微薄の金と與へて歸
至仁の所置い名もあふ水上清き綾瀬
川が教ふ習ふ善良弟子の砂子の中の玉手
瀉磨く心の光澤ぞうは〜

小説の作者

轉々堂監泉記



解き書 第十四

